

モデルへの注意狭窄が同化行動の生起に及ぼす効果*

内藤 哲雄**

THE EFFECT OF CONCENTRATED ATTENTION TO THE MODEL UPON AROUSAL OF ASSIMILATIVE BEHAVIOR

Abstract

It was hypothesized from the concept of identification that assimilative behavior takes place in adults when the unconscious mechanism is dominant. The purpose of this study is to examine if assimilative behavior arouses under the condition of concentrated attention to the model. Two model boxers fought. And the fight was recorded on Video Tape. Subjects were told that one of the models was a student of their university and the other was another university student. They watched the boxing match on television without bodily movement and their EMG was obtained. Two subjects showed typical change in EMG when the boxer of their university was striking. This result supported the hypothesis.

はじめに

人間においては、行動の獲得と変容の多くが、単独事態での試行錯誤によるよりも、他者の行動の模倣によって成立することが知られている。Tarde (1890) や Le Bon (1895) が、人間行動のこうした傾性に着目し、社会現象の説明原理としてとりあげて以来、模倣に関する研究が盛んに試みられるようになった。そして Ross (1908) に代表されるように、初期の研究者たちは、いかに多くの現象が模倣や暗示によって説明できるかを明示することに精力を傾注してきたといえよう。しかしそうした努力は、模倣行動に関する研究の重要性を強調し示唆する反面で、必然的に多種多様な現象を同一機制によって解釈するという結果を招来することになり、模倣の概念は曖昧なものとならざるを得なかったのである。さらに模倣の生起機制についても、模倣の本能が存在するゆえに模倣するといった、単純で循環論法的な本能説に対して疑義が唱えられるようになってきた。このため模倣研究は次第に衰退していったのである。ところが、Allport (1954, 1968) の指摘したように、社会的行動の解明のための研究対象としての意義は、今日においても失われることがないといえる。このような事情から近年では、対象を限定し概念規定を明確にしようとする動向が生じ、模倣に関連する研究が再び活発となるとともに、いくつかの理論が提唱されてきたのである。

* 本実験の概要は、日本教育心理学会第20回総会（内藤・西原，1978）において報告された

** 信州大学医療技術短期大学部一般教育

内藤(1981)は、そうした模倣をとりまく諸理論のなかで、反射的・自動的模倣(reflexive or automatic imitation)、社会的学習理論(social learning theory)、同調行動(conformity behavior)、社会的促進(social facilitation)の4つをとりあげ、これらの異同や適用範囲と限界について考察している。その中で、とくに反射的・自動的模倣については、今日的レベルでの研究の少ないことが指摘された。非言語的コミュニケーションやパニックに関する多くの研究が示唆するように(例えば、前者では Sommer, 1969; Argyle, 1975など、後者では安倍, 1974; 杉万ら, 1983, 1984など)、成人においても無意図的な対人機制の果たす役割は看過できないといえよう。このような背景から、比較行動学や精神分析の知見や実験的研究(内藤, 1977, 1979; 内藤・西原, 1978)をもとに、同化行動(assimilative behavior)の理論の提唱と展望を試みたのである。

同化行動は、成人の無意図的な対人機制を説明する有効な理論的枠組と考えられるものであり、モデルとの無意図的な一体化の志向(身体的接着)と、これと表裏の関係にある無意図的な模倣の2側面からなる。また発達のみにみれば、内藤(1984)において言及したように、主として Piaget (1945)が感覚運動期とよぶ期間にほぼ対応して生起する機制である。そして発達にともない、身体的接着は心理的接着へ、無意図的模倣は意図的模倣へと変容する(図1参照)。しかし成人においても、社会的意識性^{脚注1}の欠如する事態、すな

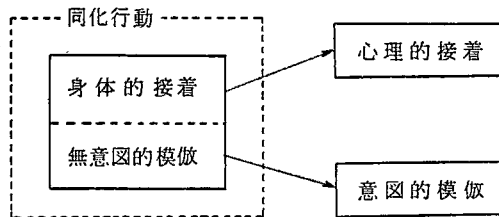


図1 同化行動と発達の変容

わち Freud (1921) が同一視の理論において示したような、無意識の機制が支配的な事態では生起すると定義されている。

ところで、内藤(1977)は、成人における同化行動の生起条件の1つとして恐怖をとりあげ、実験的検討を試み

た。恐怖喚起と身体的接着の測定には、Shachter (1959)の電気ショックに関する教示を用いた実験を参考にし、無意図的模倣を測定するための材料にはクリック音を採用した。結果は、恐怖条件下で身体的接着と無意図的模倣の両側面がともに発現すること、すなわち同化行動が生起することを検証するものであった。また内藤(1979)は、注意を他在させるならば、その結果として無意識の機制が支配的となることから、この条件下でも生起することを予想した。実験は、エレベーターへの乗降という日常的場面を利用した準フィールド型であった。独立変数は、目標の階に向かうとき注意他在のための課題があたえられるか否かと、目標より下の階でエレベーターが停止したときサクラが降りるかどまるかの2要因であった。また従属変数は、エレベーターが途中の階で停ったとき降りた被験者の人数である。結果は、途中の階で降りた被験者の行動が無意図的なものであること、課題があたえられサクラが降りるときが他のいずれよりも多く降りることを示した。これは、注意他在条件下で同化行動の両側面のいずれの指標ともみなせる追従行動が発現しやすいことを示すものであった。

脚注1) ここでの社会的意識性とは、模倣や接着の当該状況における客観的な意味についての意識、またモデルとの対人関係やモデルの意図や感情への配慮である。

以上のように、恐怖と注意他在の2条件下において同化行動の生起することがあきらかにされたが、本研究では、さらにモデルへの注意が狭窄する条件下での生起を検討しようとするものである。複数のモデルの中から特定のモデルが選択され注意が集中し狭窄するならば、目的的行動への配慮が困難となり無意識の機制が支配的となる。同時に、注意の狭窄するモデルに対しては、同化行動の側面である無意図的な一体化（すなわち身体的接着）が発現することになる。従って同化行動のもう一方の側面である無意図的模倣が観察されるであろうと考えられる。

方 法

被験者

W大学学生で、ボクシングへの好悪評定尺度（7段階）に「非常に好き」と回答した7名。これらのうち典型者2名のデータが分析された。

実験刺激

1977年6月18日に後樂園ホールで開催された関東ボクシングリーグ戦のうち、W大学対R大学の第4試合と第5試合をビデオテープに収録し、テレビ（SONY SOLID STATE 14インチ 白黒）で再生した。

装置および実験室

EMGの測定には万能型脳波計（三栄測器、140システムポリグラフ）、電極には直径10mmの円状銀円電極が用いられた。また測定方法は、表面電極による双極誘導が採用され、インク書きペンレコーダーにより記録された。実験室はノイズが筋電位に混入しないようシールドされており、テレビおよびコードも銅製の網（1mm目）等でシールドされた。

手続き

ボクシングを「非常に好き」と回答した被験者を1名ずつ実験室に案内し、前腕二頭筋に電極をつけ、手や身体を動かしたりしないように教示し、実験事態に移った。被験者に観戦させたのは第4および第5の2試合で、第4試合はトランクスに白線の入ったR大学の選手が判定勝ち、第5試合はトランクスにWマークの入ったW大学の選手がテクニカルKO勝ちとなっている。そこで、いずれか一方の選手の身体的特徴や攻撃の仕方が同化行動の生起に影響する可能性をチェックするために以下の2群に分けた。“第1群”の被験者には、実際のW大学の選手をW大学の選手として、“第2群”の被験者には、実際にはR大学の選手をW大学の選手として紹介した。いずれの群の被験者にも、第5試合で優勝が決定すると思わせるように、以下の教示がなされた。〔第1群〕これからみせるのは、W大学がすでに2勝、R大学が1勝した後の第4試合と第5試合である。全部で5試合だから、もしW大学が第4か第5のいずれかの試合で勝てばW大学の優勝が決まり、両試合とも敗ればR大学が優勝することになる。W大学の選手は右コーナーのトランクスにWマークのある方で、R大学の選手は左コーナーのトランクスに白線のある方である。〔第2群〕これからみせるのは、R大学がすでに2勝、W大学が1勝したあとの第4試合と第5試合である。もしW大学が第4と第5の両方に勝てばW大学の優勝が決まり、もし1試

合でも敗ればR大学の優勝が決まる。W大学の選手は左のコーナーのトランクスに白線が入っている方で、R大学の選手は右のコーナーのトランクスに模様のように自分のインシャルを入れている方である。

ついで第4試合の間に装置の調整を行ない、試合終了後にいずれの群に対しても、両大学は2対2となり第5試合で優勝が決まることを告げた。

以上の手続きによって、ボクシングの好きな被験者は、優勝決定戦に熱中するであろう。そして自分と同じW大学に属すると教示された選手と同一化し注意を狭窄すると考えられ、目的的な適応機制が十分に機能しなくなり、それゆえ無目的的な同化行動の生起することが予想された。すなわち、W大学の選手との一体化が発現するにともない無意図的な模倣が発現するであろうということである。この仮説を検討するため、第5試合観戦中の被験者のEMGの測定と、体動等のチェックのための観察がなされた。

結 果

第5試合のなかで、R大学の選手が一方的に優勢な部分は、第1ラウンドの95～98秒と100～107秒であり、W大学の選手が一方的に連打しているのは、第2ラウンドの143～151秒の間である。そこでこれらの時間帯のEMGが考察すべき従属変数とされた。

まず、いずれがW大学の選手であるかについての指示と被験者の認知については、被験者の全員により教示と一致した回答が得られたことから、第1群と第2群に関する実験操作は、ほぼ有効であったといえよう。EMGの結果については、第1群で1名、第2群で1名、合計2名で典型的にみられ、図2のようになった。上半分が第1群の被験者NのEMG、下半分が第2群のMのEMGで、左側が第1ラウンド、右側が第2ラウンドである。図をみると、実際のW大学の選手をW大学の選手として教示されたNの場合は、第1ラウ

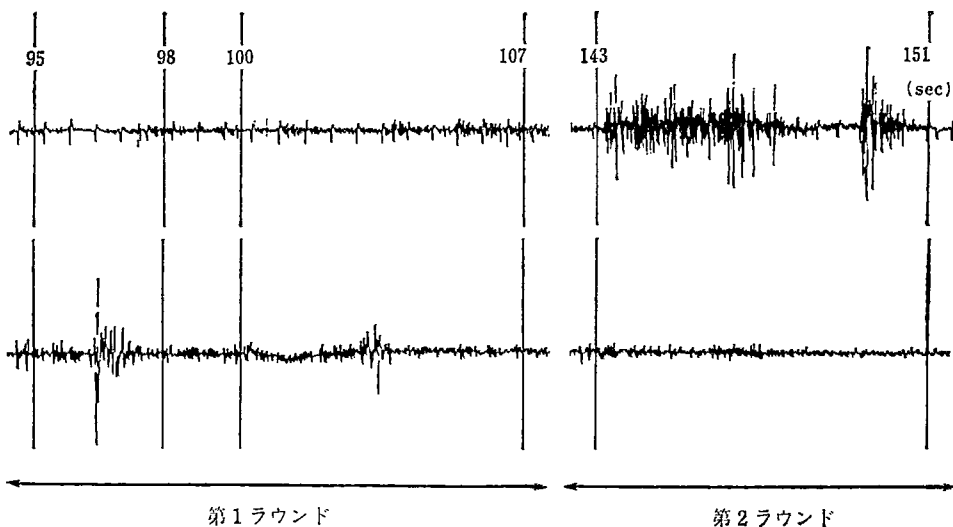


図2 上：第1群の被験者NのEMG，下：第2群の被験者MのEMG

ンドの95~98秒, 100~107秒では EMG の活動が小さいのに対し, 第2ラウンドの143~151秒の間では大きかった。また, 実際にはR大学の選手をW大学の選手として教示された第2群のMの場合には, 第1ラウンドの方で EMG の活動が大きく, 第2ラウンドでは小さくなっている。第1群, 第2群のそれぞれの典型的な結果は, ともに仮説を支持する方向にあるといえよう。

考 察

試合の進行に熱中して, 選手と一体化し無意図的な模倣が発現することは, 日常場面でも観察されることがある。例えば長嶋(1976)は, 巨人軍の監督として観察した試合中の突貫コーチ黒江のエピソードについて報告している。黒江コーチはゲームに夢中になり, 三塁コーチスボックスのなかで, プレー中の選手と一体となってしまうがちであった。選手が滑り込めば, コーチスボックスのなかで一緒に滑り込む。ホームに向かって選手が突っ込むと, 彼も一緒にホームに走ってくる。このためアンパイアから, コーチスボックスにじっとしていてくれないとジャッジがしにくいと注意されたというのである。本研究では, このような対人機制を同化行動の枠組で解釈するとともに, 統制された実験事態において確認することを目的とした。そこで被験者が試合に熱中しモデルに注意を狭窄するよう操作するために, ボクシングを非常に好きと回答した者を被験者とし, さらにボクサーの一方が被験者と同じ大学に所属し, 優勝をかけて戦う事態として設定した。無意図的な模倣を確認するための EMG は, 仮説を支持する方向にあった。これは, 手や身体を動かさないように教示し, 体動がなかったことを考慮するならば, 被験者の注意がモデルに狭窄し一体化したのにもなって, 無意図的な模倣が発現したことを示すものであるといえよう。換言すれば, モデルに注意が狭窄する事態では, 成人においても同化行動が生起したことを実験事態において確認したということになる。しかしながら, 本実験にはいくつかの問題が残されているといえよう。まず, 7名の被験者のうち, 5名では筋電位というべき活動がなく, 2名のみ典型的にみられたことがあげられる。この原因としては, まず試合がアマチュアによるものであり, 迫りに欠けたことがあげられよう。テレビが14インチの比較的小型でありかつ白黒であったことや, 表面に銅製の網がかけられていたこと, スピーカーが小さく音質が悪く, 臨場感がとぼしかったことも問題であろう。また, 慣れない実験室での観戦であったこと, EMG 測定上の都合により手や身体を動かしてはならないと教示されたことで, 試合に充分熱中できなかったこともあげられよう。これらの問題点を改善し, さらに実験を重ねるとともに, 他の条件下での同化行動の生起を検討していくことが, 今後の課題であろう。

要 約

モデルに注意が狭窄する事態においては, 同化行動が成人においても生起することを実験的に検討することが, 本研究の目的であった。実験では, 特定のモデルに対し注意が狭窄し一体化が生じるように操作がなされるとともに, 無意図的な模倣の発現が EMG によ

て検討された。結果は、7名のうち5名にはモデルの行動を注視する間、筋の活動はほとんど生じないで、2名のみに典型的にみられた。この典型的結果は、仮説を支持する方向にあった。ついで今後に残された課題が論議された。

引用文献

- 1) 安倍北夫 1974 パニックの心理 講談社
- 2) オールポート 高橋 徹・本間康平(訳) 1956 社会心理学史 清水幾太郎・日高六郎・池内一・高橋 徹(監修) 社会心理学講座 第1巻 基礎理論 I(1) みすず書房 (Allport, G. W. 1954 The historical background of social psychology. In G. Lindzey (ed.) The handbook of social psychology.)
- 3) Allport, G. W. 1968 The historical background of modern social psychology. In G. Lindzey & E. Aronson (eds.) The handbook of social psychology. (2nd.) Vol. 1 Reading, Massachusetts: Addison-Wesley Publishing Company, pp. 1-80.
- 4) Argyle, M. 1975 Bodily communication. London: Methuen & Co Ltd.
- 5) フロイト 井村恒郎(訳) 1970 自我論 日本教文社 pp 83-188. (Freud, S. 1921 Massenpsychologie und Ich-Analyse.)
- 6) ル・ボン 桜井成夫(訳) 1947 群衆心理 岡倉書房 (LeBon, G. 1895 Psychologie des foules.)
- 7) 長嶋茂雄 1976 朝の散歩道 20 わがコーチ陣 その三 報知新聞 1976年11月26日付
- 8) 内藤哲雄 1977 対人機制としての同化行動に関する実験的研究 (I): 同化行動生起におよぼす一条件としての恐怖の効果 心理学研究, 48, pp 156-162.
- 9) 内藤哲雄 1979 対人機制としての同化行動に関する実験的研究 (II): 同化行動生起におよぼす注意他在の効果 心理学研究, 50, pp 279-282.
- 10) 内藤哲雄 1981 模倣行動に関する一考察: 同化行動の提唱とその展望 早稲田心理学年報, 13, pp 56-65.
- 11) 内藤哲雄 1984 同化行動の理論的考察: 模倣と接着の発達の展開 対人行動学研究, 3, pp 13-19.
- 12) 内藤哲雄・西原 均 1978 同化行動に関する実験的研究: モデルに注意が狭窄する場合 日本教育心理学会第20回総会発表論文集, pp 534-535.
- 13) ピアジェ 大伴 茂(訳) 1968 模倣の心理学 黎明書房 (Piaget, J. 1945 La formation du symbole chez L'enfant.)
- 14) Ross, E. A. 1908 Social psychology: an outline and source book. New York: Macmillan Company.
- 15) Schachter, S. 1959 The psychology of affiliation. Stanford, California: Stanford University Press.
- 16) ソマー 磯山貞登(訳) 1972 人間の空間: デザインの行動的研究 鹿島出版会 (Sommer, R. 1969 Personal space: the behavioral basis of design.)
- 17) 杉万俊夫・三隅二不二・佐古秀一 1983 緊急避難状況における避難誘導方法に関するアクション・リサーチ (I): 指差誘導法と吸着誘導法 実験社会心理学研究, 22, pp 95-98.
- 18) 杉万俊夫・三隅二不二 1984 緊急避難状況における避難誘導方法に関するアクション・リサーチ(II): 誘導者と避難者の人数比が指差誘導法と吸着誘導法に及ぼす効果, 23, pp 107-115.

(1985年9月30日 受付)